

氏名(本籍)	なかむら たかし 中村 尚史 ( 山口県 )
学位の種類	博士(医学)
学位授与番号	甲 第 607 号
学位授与日付	平成 26 年 3 月 13 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	思春期、青年期における広汎性発達障害を背景にもつ適応障害患者の 臨床的特徴
審査委員	教授 尾内 一信      教授 永井 敦      教授 石原 克彦

#### 論文の内容の要旨・論文審査の結果の報告

申請論文は、思春期、青年期の適応障害患者において広汎性発達障害（PDD）を基盤にもつ患者の割合とPDDに関連する因子について検討した報告である。DMS-IV-TR (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, 4<sup>th</sup>ed, Text Revision) によって適応障害と診断された12歳以上30歳以下の患者58名を対象とし、精神症状については自記式質問紙である日本語版パラノイアチェックリスト（JPC）、思春期の精神病体験（PLEs）、精神症状評価尺度（SCL-90-R）を用いて、PDDについては詳細な養育歴の聴取と自閉症スペクトラム指数日本版（AQ-J）、自閉症スクリーニング質問紙（ASQ）を用いてそれぞれの臨床的特徴を評価した。その結果、1）58名のうちPDDと診断されたのは32名（55.1%）であった。2）AQ-Jについては、PDDの有無に関してコミュニケーションが有意な関連性を示した。3）JPCについては、PDD群が非PDD群と比較して総得点、確信度において有意に高かった。4）SCL-90-Rについては、PDD群は恐怖症性不安、妄想、精神病症状、強迫症状、対人過敏、抑うつ、不安、その他8項目が非PDDと比較して有意に高かった。PDDの有無に関しては強迫症状が有意に関連していた。5）各質問紙の総得点とPDDとの関連を見ると、JPCの総得点のみがPDDと有意な関連性を示した。これまでの先行研究では、既にPDDと診断されている事例に対して併存する精神疾患を調べる研究であり、適応障害と診断された思春期・青年期の患者を対象とした本研究は全く新しい視点の研究であり医学的に独創性のある意義のある研究といえる。また、本研究により適応障害と診断された思春期・青年期の患者に軽度のPDDが非常に多く含まれており、被害妄想や強迫症状など様々な精神症状を自覚しているため、JPCなどの質問紙を併用することによってPDDの診断が容易になることが明らかとなった。早期にPDDの併存に気

づくことで患者の認知特性に合わせた環境調整や精神療法を行うことが可能となり、治療上の著しい予後の改善が期待できるため臨床的に価値が高い成果である。以上により本論文は学位論文として値すると判定した。

### 学位審査会（最終試験）の結果の要旨

平成 25 年 12 月 19 日に開催された学位審査会において学位申請者による論文内容の発表が行われ、審査委員から疾患定義、適応障害や PDD の疫学、分類法の変遷、対象患者の選択法、研究の意義などの質問があり学位申請者からの答弁があった。それぞれの質問に対し、いずれも真摯な態度での確かつ適切な回答が得られた。本研究の成果は、全く新しい視点の研究であり医学的に独創性のある研究であり、かつ臨床的に意義が高く、各審査委員による合議の結果、申請者は専攻科目ならびに関連分野に十分な学識と研究遂行能力を有すると判断されたので、学位審査試験結果を合格と判定した。